

山 紫 水 明



宮城県石巻市・作田島船魂稲荷神社

第一三三号 目次

表紙

創立六十五周年記念講演会 講演録

創立六十五周年記念式典

歴代会長会

OB大懇親会

皇居勤労奉仕参加報告

東日本大震災復興支援活動

親睦ボウリング大会

神職さんと行く伊勢神宮

巫女のための神宮研修会

各委員会報告

近畿・中央地区報告

編集後記

32 28 24 23 22 21 19 16 16 15 14 3 1

創立六十五周年記念講演会 講演録

「見える命 見えないいのち」

音羽山清水寺 貫主 森 清範 先生

ただいまご紹介頂きました清水寺住職でございます。

神道青年会が創立六十五年をお迎えになられた大変意義深い時に、ご案内を頂きましたこと誠に忝く存じます。六十五年前と言いますと、日本が戦争に負け日本人の心身が荒廃している頃であります。そのなかにおいて設立が為されたということは、いち早く日本人の精神をしっかりと取り戻さなければならないという先輩諸氏の志であり、それを今日までこうして受け継いでおられる皆様方のお力に篤い敬意を表するものでございます。

私が今日ここにご案内を賜りましたのは、石清水八幡宮の秘書室長で、また貴会長でもおられます櫻井様よりお声を掛けて頂いたご縁でございます。石清水八幡宮さまとは、平成十五年に寛永再建三百八十年を記念して当山の奥之院御本尊さまの二百四十二年ぶりの御開帳の時でございます。その折りに、石清水八幡宮の宮司でいらっしゃいます田中恆清宮司様にご出仕賜り、神道式で本堂御宝前にて祭祀をお勤め頂いて以来のご縁でございます。これ以降、春には国家安泰世界平和祈願献花祭を当山にて、また秋には私達が石清水さまに参りまして仏式で御神前にて法要をお勤めさせて頂いております。また、平成二十二年には応神天皇さま御生誕一千

七百年、石清水八幡宮御鎮座一千五百年記念にも御神前で法要をお勤めさせて頂きました。

石清水八幡宮さまとのご縁ができました奥之院御本尊の御開帳ですが、今申しましたように、実に二百四十三年ぶりでした。御開帳に至るにはこのような経緯がありました。奥之院御開帳より遡ること三年前、平成十二年に本堂御本尊さまの御開帳がありました。本堂は三十三年に一度の御開帳でございます。その時に文化庁さんが「本堂秘仏の御本尊を調査したい」と、申し出がありました。その時に思い出しましたのが、その更に三十三年前の御開帳の時です。私もまだ小僧の頃です。師匠に同じく文化庁さんから秘仏を調べたいと言って来られました。その時に師匠が「調べるってどないするんや」と尋ねられました。すると「そらまあレントゲンかけて、そしてこうします」と答えられると、「そんなことやめてくれ」と師匠が怒られ調査ができてなかったのです。

三十三年後、私の代になりまして、また来られたのですが、師匠が「あかん」って言っているのに、私が「よろしい」と言って調べてもらって、もし罰が当たったら困りますので「次の代にしてくれ」とお願いしたのでございます。しかし、「あそこもあかん、ここもあかん」と

いったら 愛想が悪いので、一度、奥之院の御本尊さんはどうだろうとなりました。しばらく開けていないと言っても二百五十年近く経っています。当時、当山の信徒総代であり東京芸大名譽教授、大仏師でもあった西村公朝先生が「なら奥之院の仏さん、いっぺん見てもらったらどうや。わたしも知らない」と仰ったので調査をして頂きました。すると、なんとなんと慶派の仏像であることが判明し直ぐに国の重要文化財になりました。さすがの西村公朝先生も「こんな仏さんが居られるとは知らなんだ」と言ってびっくりされました。数えましたら二百四十三年の間、御扉が閉まったままということでした。

御開帳の時の作法や普段の法要など、古来より伝わる法要次第には読経が無く、ただずっと仏さんの名前を読み上げて祈願をします。実はその中に「神分」という個所がございます。この「神分」というところは、日本国中の神様を勧請し祈願をするというものでございます。ちょっとそれを少し読み上げてみます。「修正会」と言いまして正月に国家安泰五穀豊穰を祈願する法要の場面ですが、「修正会の御勤め御願円満の砌有れば(中略)天照大神八幡三所賀茂下上松尾平野稻荷大原春日住吉山王新羅北野鹿島八坂等諸大明神(中略)地主明神一百余処の諸大明神部類眷属等(後略)」という具合に、沢山の神様を勧請いたしましたして祈願をしております。この神分に石清水八幡宮さんのお名前もあり、同じ「清水」という「水」のご縁から石清水八幡宮の田中恆清宮司さまに合同の祈願祭をお願いしたら快く引き受けて頂きました。神仏のお力によって今日に至るのでございます。

さて清水寺は、宝亀九年(七七八)に創建をされておりますので、約一千二百年余りの歴史を有しますが、平安時代より大衆庶民信仰の寺、観音霊場として弘がりました。例えば枕草子、源氏物語、平家物語から御伽草子など日本文学や謡曲にも随分と出て参ります。江戸時代には、浄瑠璃、歌舞伎ですね。こういう中にも観音さまの霊験が謡われております。また、古典落語の中にも採り上げられるなどなど、大衆文化の中にお寺がありました。しかしもう一つ特徴的なのは、実に十何回余り大火事に遭遇しているということです。

当山には清水寺史という歴史をまとめたものが無かったものですから、二十年ほど前に、信徒総代であった林屋辰三郎先生に相談いたしました。ところが、十数回も大きく焼けているのでお寺に史料が残っていないのですね。ただ、寺外の歴史書や史料には残っていたのです。それで、外の史料と共に「編纂しよう」ということで十数年かけて寺史を編纂して頂きました。林屋先生は「よう焼けると」、「十何回も焼けるお寺も珍しいけれども、焼けたらすぐに立ち直るのがなお珍しい、これも歴史や」と言っておられました。林屋先生がおっしゃるように、本当によく焼けております。

焼けている原因の一つに焼き討ちがあります。確か二条天皇だと思いますが、二条天皇の葬儀の時に「札打」と言う供養の札を打ったそうです。現在は昭和四十年に独立しましたが、その頃は奈良の興福寺の配下になりました。皆さんご承知のように「南都北嶺の戦い」と言われ、興福寺と比叡山は大変仲が悪かった。そんな時に、札打が比叡山の上に興福寺の札が打ってあったそうでございます。それで比叡山の衆徒が大変腹を立てまして、興福寺の札を外して投

げ捨てた。これであらいことになって、比叡山から僧兵が出てきました「興福寺配下の京都にある清水寺を焼いてしまえ」ということで焼き討ちが度々ありました。この時の様子が、室町期に描かれまして現在は重要文化財の『清水寺縁起絵巻』三巻に記されております。焼かれて大いに燃えている絵が描かれています。比叡山の方に「昔はよく焼き討ちにされた」とか、八百年も昔のことがたまに話題となりますが、今は比叡山の和尚さんとも仲良くいたしております。

今の伽藍は寛永十年（一六三三）再建のものです。寛永六年（一六二九）に山内で出火しほぼ全山焼けてしまい、四年後に現在の伽藍を再興いたしております。わずか四年間です。四年で今の本堂だけではなく現在の伽藍を再興しているのであります。このエネルギーというのは「凄いもんやなあ」と感心するのであります。約三百八十年を越える建築ですので、現在は「平成の大修理」ということで、国宝の本堂をはじめ八棟の重要文化財等を解体半解体修理しているところでございます。

皆さん方は、牛若丸と弁慶の刀の取り合いは五条の大橋で丁々発止をしたと記憶されていると思います。しかし、五百年程前のものですが『義経記』があります。これは義経の一代記が書かれております。この伝記では、牛若丸と弁慶の件は五条大橋ではございません。実は清水の舞台で刀の取合いをやっているのです。挿絵にも描かれています。ところが、この話が五条大橋に持っていかれたのです。誠に惜しいので取り返しに行こうかと思うのですが時既に遅し。バスガイドさんが五条大橋を通りますと「京の五条の橋の上」と歌われてしまっております。

十数回火事に見舞われている中で、火事でも焼けないものがあります。それは何かと言うと金属です。これは焼けないです。石は火が入るとボロボロと崩れます。その金属とは梵鐘ですね。釣鐘。この釣鐘は、釣鐘堂の屋根は焼けます。するとドスンと落ちると思うのです。そして落ちますとその釣鐘は火が入ってしまいます。梵鐘屋さんに聞きますと、その場合は溶かしてまた新しい鐘楼ができるので、改鑄をしてまた釣鐘にするそうです。

十年程前まで撞いておりました釣鐘は、今から五百年ほど前に鑄造されたものでした。ただ懸けているだけではなく現役で毎日撞いておりましたので文化庁から「金属疲労を起こしたらあかんさかいに、お蔵入りにして新しい梵鐘を造られたらどうですか」ということで、新しい梵鐘を十年前に造り変えました。門前町の土産物屋さんのご主人と月に一度、情報交換をしまして防災防犯から動向など色んなことについて話をいたしております。その中で、梵鐘の話が出まして「掛け替えるなら門前町で平成の大梵鐘を造らして下さい」ということになりました。これが現在かかっております平成の大梵鐘でございます。

当山では毎朝五時に十三打撞いております。この五時の十三打の鐘を合図に法衣に着替えて本堂に入ってお勤めをし、順番に諸堂を廻って寺務所へ帰ってくるというのが私の日課でございます。鐘を合図に動き出しますので、今まで梵鐘をそんなにじつと見たわけではございません。しかし、五百年前の梵鐘がお蔵入りになるということでございますので、改めて梵鐘を眺めますと「そうか」と非常に感心した銘文がありました。「文明十年 願阿」という銘です。大き

い字ですのではっきりと見えます。この梵鐘が「文明十年 願阿」という方が造ったということ意味します。この願阿上人という方は、あまり記録が無いのですが、聖でして色々な施行をしておられます。もう一つびっくりしましたのが、文明十年という年です。願阿上人は文明十年にこの鐘を鑄造したのを皮切りに、順々に諸堂伽藍を再建するのでございますが、文明十年の前年の文明九年がどのような年であつたかご存じでしょうか。それは、応仁の乱が終わつた年です。ですから、応仁の乱が終わつた翌年にお寺の鐘を造っているのです。それはもう大変な時だつたと思いますよ。京都はもう焦土と化しております。応仁の乱で焼け残つたものも若干はあつたでしょうが、焼け野原だつたと思います。清水寺も焼けております。そんななかでも鐘を鑄造しているのです。大変感動いたしました。この願阿さんや鑄造された頃を調べてみますと「晴富宿禰」というお公家さんの日記がございました。文明十年四月の項に「十六日に今日清水寺の釣鐘が出来ました」と書いてあるのですね。「内裏の西に仮の屋根を造つて、願阿という方が願主でございます」と記録されているのです。そして「十七日、沢山の人が釣鐘を参詣に行った」と書いてあるのです。つまり、鑄造の物見遊山ではなく「参詣」だということです。応仁の乱で沢山の人が亡くなつております。その供養に行ったという記録なのであります。そしてこの鐘を車に乗せて、「洛中の諸人剛力」と書いてございますから、その車を沢山の人が力を合せて「わっしょいわっしょい」と運んで行った。さらには「木振これに乗る」「風流あり」とありますから、釣鐘の車の周りで囃し立てながら鐘や太鼓を鳴らしていたのです。「木振」といいますのは、林屋先生に聞きまし

たら「松の木を立てて遠くからでも何かが運行しているというのが目立つようになしたんや」と申され「恐らくこれは、京都の祇園祭を再興する原型になつたのではないか」と、先生は言っておられました。

願阿上人は施行をされ、沢山の人々に食べるものを与えたり、丁重に死者を葬つたりされたようです。この施行をされていた願阿上人だからこそみんなが鐘を造ることに協力したのだと思います。この釣鐘は「京都の人々、力をだしましょう」「これから再興いたしましょう」「人が人を傷つけ殺し合うようなそんな戦争を止めよう」「亡くなつた方への菩提」というようなことを、この鐘を撞いて人々に知らせられたのではないかと想像するわけでございます。

先ほども言いましたが、この鐘を十三撞いて朝の五時にお勤めをするのですが、警備員さんはその鐘を撞き朝の開門用意をして仕事が終わります。梵鐘の新旧が替わる日が決まり、旧梵鐘の撞く数が決まつたので「私に撞かせてんか」と私が撞いて、それからお勤めに入ったのですが、撞いておりますと、何ともなく寂しい。五百年もずっと毎朝撞いてきて、私の代に替わるということは「実に寂しい」と、そんな思いをいたしておりましたら、芭蕉の句を思い出しました。芭蕉の『涼しさや鐘を離れる鐘の音』とこういう歌です。『涼しさや鐘を離れる鐘の音』。これを本歌取りにいたしまして、「涼しさや」を「寂しさや」に変え「寂しさや鐘を離れる鐘の音」と詠みました。

この「梵鐘」の「梵」とは、サンスクリットでは「ブラフマン」と言います。これを音写して「ボンランマ」とされます。さらに「ランマ」という字が省略され「梵」となります。このような省略はよくあります。「ストウパー」というのはお釈迦さまのお墓を指すのですが、

それを「卒塔婆」(そとうば)と音訳して漢字に当てはめています。最後はその「塔」だけが残るわけでございます。ですから三重塔・五重塔とは、元々これは「お釈迦さまのお墓」という意味でございます。このように他にも沢山省略された語があるのですが、この「ボン」というもの「ボンランマ」を音写したのですが、中国の学僧はそこに音訳と漢訳を両方合わせて「梵」を当てているのです。「梵」という字は「ボン」と発音すると同時に「爽やか」という字義です。あるいは「莊嚴」とか「嚴か」とか「清浄」とかいう意味がございます。『観音経』というお経の中には「梵音、梵の音は海潮音である」と説いており、海の潮のザワザワという音が莊嚴であるということを「梵」という字で表現しているでございます。

しかし、別に莊嚴なものは釣鐘の音だけとは違いまして、神社でもそうでございます。境内に入りましたら、いつも綺麗にお参りになる方の歓迎をしておられます。それと同じように寺も掃除や本堂には花とか蝋燭とかを立てて莊嚴をいたします。その空間へ入りますと嚴かな空気によって私達の心が清浄になる、莊嚴されていくということですから、この「梵心」という言葉は、仏教用語の熟語にはございせんけれども「梵心」という言葉があってもいいんじゃないか。「梵なる心」「清浄なる、莊嚴なる心」というものを「梵心」というように言っているのでございます。

「梵」という字は「ソヨギ」とも読みます。広島カープに「梵」(そよぎ)という選手がおられます。風で笹がそよぐというような爽やかな情景を表現した字です。ですから寺の庭なんかも同じです。また着ている法衣も同じでございます。境内へ出ていましたら、学生さ

んが「和尚さん、写真撮って下さい」とよく声をかけられます。それで「撮りましょう」と言って写真に写ります。修学旅行生は、相手が誰かということは全く知らないわけでございます。しかし、私を撮りたいわけじゃないのです。衣を撮りたいのです。天ぶらみたいものだと思って、撮っていただいておるわけですが、これもやはり「梵」の一つではないかと思えます。

お経の声も同じです。八幡さんでの法要の際に大祓詞を皆で揃って上げられるのを聞きますが非常に莊嚴なものでございました。お経の声も実はそういう意味合いを持っております。数年前に、三人の和尚さんのお経を聞いた事があります。これは日中韓仏教徒会議と言いまして、日本と中国と韓国の仏教徒が毎年寄って韓国大会、中国大会、日本大会というように開催地を廻っております。今年は中国大会ですが、以前の日本大会の時に、中国から百人、韓国から百人、日本から百人僧侶が参加したことがあります。「三百人のお経を何処で上げよう」と相談したら「まあ奈良の大仏さんしかないな」ということで東大寺のさんの快諾を得て、大仏さんの周りに三百人のお坊さんが集まりました。しかし何のお経を読むのか問題になり、結局共通する「般若心経」に決まりました。中国人は中国語で、韓国人は韓国語で、日本人は日本語で、見事に同じお経でも読んでいる音はバラバラですわ。ところが、最後の部分「揭諦 揭諦 波羅揭諦 波羅僧揭諦」という有名な箇所があるので、これはサンスクリット語をそのまま音写しておりますので、中国も韓国も日本もその部分になると同じなのです。「ぎゃーてーぎゃーてーぎゃーてー」と三百人が読みますとなかなか莊嚴でこんな姿は始め

てと思いました。

お寺で生活をしていますと釣鐘の「ゴーン」という音が、実に「ええ音やな」と思うのです。皆さん、ミレーの『晩鐘』という絵をご存知でございますか。あれはお寺の鐘の音、どこかの教会でございましょう。「カランカラン」という音だと思いますが、その音を聴いて農夫がそこで一日の感謝の祈りを捧げているのですね。「無事でございました、ありがとうございませう」と言って、神に感謝を述べているという絵でございます。「祈る」という事。「祈る」というのは、すごく宗教的な言葉に聞こえますけれども、実はその反面、日常の言葉だと思ふんです。例えば家族が半月でも外国旅行するとなったら「無事で行くねん」とや「食べるもの気をつけ、飲むもの気をつけて。初めての所やさかいに」と言って無事を祈りませんか。しかし、その対象が神様ですか。仏さまですか。と考えると神も仏も無いのですね。無くとも私たち人間の心の奥底にある「梵心」という清浄で、本当に無垢な心から祈りが捧げられるということだと思ふのです。

東日本大震災の時、陸前高田にあった高田松原の流出した松をご縁で頂きました。その流出した松の木で震災の明くる年に大きな丈六の大日如来さんを彫って頂きました。松の木で仏像を彫ることは不向きなのです。ヤニが出ますし、しかも海水に浸かっておりまです。これがまた具合悪い。しかし、京都の南丹市にございます京都伝統工芸大学校という学校の御縁があり、被災地の松の木で仏さまを彫るという事に理事長が賛同して頂きまして学生さんに彫って頂くことになりました。

粗彫りの途中で陸前高田へ運びまして、被災された方に「一瞥一

削」して頂きました。みな手を合わせて一人一人涙ながらに鑿を入れておられました。それはもう辛い光景です。沢山の人が亡くなった明くる年ですから。

被災者の方に鑿を入れて頂き仏さま京都へ帰って来られました。すると、阪神淡路大震災で被災をされた方がこの話を聞きつけて「私も一緒に彫らして欲しい」ということになりました。結局合計一万一千百十二人の方に鑿を入れて頂きました。もうこれ以上彫ったら薄うなりまして壊れてしまうので「このへんで堪忍して貰おう」ということで終えたのです。この一万人を越える方の中には、ブータン国王夫妻もおられました。数年前にブータン国王が来日されたとき、このことを聞かれ大学へ行つて「私も彫らせて頂きたい」となり、王妃とお二人でご冥福を祈り、鑿を入れられました。

あと忘れられない話が、理事長さんからうかがったのですが、小学校の男の子が鑿を入れるところに来たそうです。「先生、僕にも彫らして下さい」と。「どうぞどうぞ」と言ったら、その小学校の低学年の男の子が、手を合わせてノミで「ゴーン」と打ったのです。すると、その子供が「先生、僕はこれですーっとしました」と言うのです。このことを聞いてびっくりしたのです。この子の環境は分かりません。分かりますが恐らく身近な人、ひよっとしたら肉親を亡くしているのか分かりません。あるいは学校の友達や近所の人を亡くしているもしくは震災の凄惨な現場を見てきている。心の中で言葉にならないようなモヤモヤした気持ちがあったのでしょうか。「亡くなった人はどうしているのだろう」などと、色んな感情や記憶が入り乱れる思いだったのでしょうか。その「ゴーン」と打って祈るという事によって

自分のモヤモヤしたものが、スーと霧が晴れていったのではないかな。私はそのように理解したのでございます。

ですから「祈る」ということは、極めて私は大切な事だと。「祈る」という能動が「祈れた」という受動として帰ってくる。

仏教で「祈り」を考えると大きく二つあると思うのです。「仏を祈る」と「仏に祈る」が考えられるのではないかと思います。「仏を祈る」と言った場合には、何も注文をつけずに「ありがとうございます。おかげ様でございます。」と言う祈り。それから「仏に祈る」というのは、何かしらの目的を持っている。

「清水の舞台から飛んだ気持ち」という諺がございます。実は、本当に実際沢山の人が飛んでいるのです。けれども、これは自死ではなく「願かけ」なのです。お百度、お千度を踏んだり水垢離をしたりするのと同じなのです。「舞台から飛ぶ」というのも、一つの目的を持っている「仏に祈る」ということでございます。では、大切なのは「じゃあ仏ってなにか」ということです。これがちょっと難しいのです。以前、立命館大学で「連続宗教講座」というのがありました。その時に学生さんが「和尚さん仏って何ですか。一言で言ったら何ですか」という質問があったのです。これがなかなか難しい。仏教には色々と宗旨宗派がございます。ですから、仏さんの捉え方がそれぞれ違うのでございますが、日本仏教の中では一つ共通したところがあります。その共通は何かと言いますと「全ての物に仏が宿る」ということです。これが基本です。天台、真言、浄土、禅、法華も、全てに共通しております。この根拠が『涅槃経』という經典の中に説かれる「一切衆生悉有仏性」です。「全てのものに仏が宿る」という考え方です。こ

の「一切衆生悉有仏性」という考え方が中国、朝鮮半島を経て日本に入りました。そうすると、この「一切衆生悉有仏性」という言葉が更に展開されまして「草木国土悉皆成仏」に変わります。木も草も国土というような抽象的なものまで仏さんと位置づけられます。涅槃経では「悉有仏性」であって「仏性が備わっている」と言うのですが、日本に参りましたら「悉皆成仏」、つまり「既に仏だ」ということになるのです。これは、天台の本覚思想に出てきます。全てのものが仏さんになっている、全てに仏が宿るということならば、もう少し意味を考えたら「全てに命が宿る」というように捉えてはどうかと。だから「命の仏格化」。「命の仏格化したものが仏だ」と理解したらどうか。「全てのものが生きている」というようにこの意味を受容できないかと思えます。

以前、京都議定書が発行されました時に、当時のケニアの環境副大臣であった故ワンガリ・マタイさんが来られました。当時の小泉総理との会談で「環境を守るのに素晴らしい日本の言葉があります。それはもったいないという言葉です」と話されたことが大変話題になりました。その会談の翌日に当山に来られたので「我々が勿体ないと言うのは、そのものの形、そのものを無駄にするだけではなく、そこに生きている心というものが、命というものがある。だからそこに生きている命をも我々は見ている」と。例えば「花を見ても決して花の形だけを見えていない。この花に生きている命を同時に我々は見ているのですよ」。「だから、勿体ないという言葉には形態的なものだけではなく命をも含まれているのです」と話をしました。

「全てに命がある」。仏教の根本思想は、私は「命の思想」、その中

身は縁起論と仏性論とちよつと理屈があるのですが、それはともかくも「共に生きて共に病み、共に老い、共に亡くなっていく」という、命のメカニズムを一つの思想にまとめたものが、仏教の根本思想だと考えています。四月八日はお釈迦さまの誕生日でございますが、その時にはご存知のように誕生仏を飾りまして甘茶をかけます。この誕生されたときの有名な言葉が「天上天下唯我独尊」です。「天上」そして「天下」の一切の中において「唯我独尊」である。

つまり、「一人一人がこんなに尊い、こんなにかけがえない存在はございません」という「命の宣言」でもあったと思います。国を支えるのは政治や経済、教育など様々な分野があります。しかしその根本は「命の問題」です。一人一人がこんなに尊い、こんなにかけがえない、普遍的で平等な命。かけがえないものであること。私はこの国を支える根本には無くてはならないと思うのです。命の尊さを無くしては、異文化の交流も或いは他文化の共生というものも考えられません。ですから「仏を祈る」ということは「命を祈る」ということであり「命に感謝をする」ということです。そして「仏に祈る」ということは「命についてよくよく考えてみる」ということが、私は「命に祈る」ということではないかと常々思っています。

しかし命って不思議ですね。仏教大学に親しくして頂いている国際政治学の先生がおられました。もう御定年されましたが、お兄さんが御所の宗像神社の宮司さんをしていらっしやいます。一度先生に質問がしたことがあります。「先生、何で人間は生きてますのかね」と言ったら、「そらあんだ、死なへんからや」と言われた。「ほな聞きますが、何で死なないんですか」と聞き返したら「そら生きて

るさかいやろ」と言われた。結局よく分かんのですね、何で生きているのか。

「生きてるから生きてる」としか言いようがないですね。毎朝私達は目が覚めております。「朝」という字は「十月十日」と書きます。だから十月十日間お母さんのお腹の中にいて、朝を迎える。これが生まれた日だ。だから私達は毎朝生まれ変わっているのですけれども感動が無いんですね。おかしなものです。明日朝、気を付けてくださいよ。万一、目が覚めたら「おおきに。よう目を覚まさせて頂きました、おおきに」と私は言いたいですね。

先ほどご紹介頂きましたように、年末に今年の漢字一字を揮毫させて頂いております。二十二年になりました、この前は「金」でございました。「金」は三回目でございました。けどよく皆さん漢字一字の行事をよくご存じ。書いている私のことは知らないですけど、一字のことは皆よく知っておられる。この前も北海道の紋別でしたが夏に講話会がございました。市制六十年の記念ということで行ったのですが、皆さんに漢字のことを「知っているか」と聞いたら、こんな小さな子どもまで「おじちゃん、僕知っているよ」と言うのですね。「そう。おじちゃん書いているのよ」と言ったら「それは知らん」と言うのです。なぜ知らないのか考えたら、書いています所をカメラは後ろから撮るのですよ。ちやうど頭の後ろ辺りが映っているのですよ。この前も放送局に行きました時に「たまには顔映したらどうですか」と言ったら「いやいや。あれは字を映していますので、振り向いてもあきまへんで」と言われました。あの筆もいい筆です。熊野筆と言いまして、広島熊野で作っています。最近では書の筆の需要よ

りお化粧の筆を作るのが多いそうです。ちょっと横道にそれてすみませんが、あれは「牛耳筆」という筆です。芯に牛の耳の毛が入っています。牛は放牧しますと雨水が耳に入ったりして病気になるります。それで、水を奥に入れないように水を吸収する毛があります。その毛を使った筆を「牛耳筆」と申しまして、昔から良い筆とされています。この筆は何故良いか言うのと、大きい字を一筆で書きますので、墨がバツと出てしまったら次に続きません。ぐつと書いてもまだ墨の含みがあるからです。

みなさんあの字を私が選んだと思われる方が多いですが、漢検がされている行事です。私が選んでいるわけではないのです。ただ発表され書きますと「筆順が違う」とか色々電話が寺務所にかかってきます。ご存じのように楷書、行書、草書では当然筆順が違います。漢字の書き取りテストをしているのではないので、少々ことは堪忍して頂きたいと思います。

しかし命って不思議ですね。筑波大学の村上和雄先生と申しまして、遺伝子工学が専門の有名な先生がおられます。この先生の話が好きでよく本を読むのですが「命を授かる確率」というのは、一億円の宝くじが連続して百万回当たるだけの偶然性」と書いてありました。これは遺伝子工学専門の先生が仰っています。これは「命を頂く」ということは「命を頂く」ということを意味しています。しかもその中で、人間の、人の命を頂くということはほぼ無いということです。けれども今我々は、人として命を頂いております。ですから先生は、この命のことを「サムシング・グレイト」と表現されています。科学者ですが。だから、誠に不可思議な命を授かっている。科学者は命が四

十億年昔に一つ誕生して、四十億年経って二七五万種、本当は二、三千万も今あるだろうと言われております。ですから一つの命から私達に分かれておりますから、皆どこかで命として繋がっているということですね。ここにブーンと飛んでいる蚊も、ブーンと飛んでいる蠅も、私とどこかで繋がっている。命として繋がっている。そう思いますと愛しいですね。「蚊やなあ。パンツ」という訳にはいかないですね。「ああこゝ所懸命に生きとるなあ」と。命で繋がっている。私は今年で七十七歳でございますが、年齢を聞かれたら「四十億七十七歳」と言うことにしています。えらい年をとったものでございます。

学生さんによく話をするのが「命には見える命と見えない命がある。見える命は、この肉体的生命。これはかけがえない、こんなに尊い、こんなに平等な、こんなに普遍的な尊い尊厳なる命というものはない。けどこの命を支えているのは見えない命が支えている。見えない。この目では見えないけれども、必ず見える命は見えない命によって支えられている」と。科学の世界で宇宙を構成するのは「時の永遠の流れだ」と言います。そして「無限の空間の広がりだ」と。「時の永遠の流れ。無限の空間の広がり」。ここに命がある。これを仏教では「諸行無常」と言います。時は留まっておりません。止め処なく流れています。そして、ここで生まれたものが無限の空間の広がり。これを「諸法無我」と言います。「私」というものは有り得ない。全ての力によって成り立っている。これを「アミターユス」と言います。「アミターユス」「アミターバー」これを一つにして「阿弥陀」と言うようになつておるわけでございます。これが一つの仏教の命の考え方であります。

私達は、時間的にも或いは空間的にも、命というものを共有しながら今日を迎えていると思うのです。私達は相對の世界に住んでいます。年が若いとかあるいは年をとっている。男とか女とか、勝つか負けるとか相對に生きています。この相對に生きている間は、争い事は無くなりません。揉め事は無くなりません。この相對から我々は、絶対の世界というものを経験しないことには争いは無くなりません。

家庭でも同じだと思います。主人があつて嫁さんがある。主人と嫁さんと相對していたら揉めます。「私の言う事がなぜ聞けない」と。そうしたら主人が「俺の言う事をなんで聞けないの」と言うたら、これはもう相對なのです。けど、そのご主人と奥さんとの意見が一つになったら、これは相對ではなくなっていくのです。十一月二十二日は「いい夫婦」ということでございますが、その時に両方からこのラブレターを出すという、そんな習慣があるのだそうです。これをNHKがまとめたようで、ご主人から奥さんに出したものが載せられていました。

「まだ子供が小さかった頃の夫婦喧嘩である」と。「若気の至りで小さなことに腹を立てて『お前なんか実家に帰ってしまえ』と家から追い出したとき、君は泣きながら出て行ってしまったね。がらーんと寂しくなった部屋で心配そうに見上げる子供たちの顔を見つめながら、やがて君の実家から掛かってくるであろう電話に、どのように対峙しようかとあれこれ考えあぐんでいた時、しばらくして掛かってきた電話口から流れてきたのは『もつと自分の女房を大事にしろ』という、聞き慣れた僕の親父の怒鳴り声であつた。そう、君

は自分の実家に帰らずに、僕の実家に行ったのですね。まだ若かった君の悲しみの中で咄嗟にとつたその行動に、君の本当の優しさ、賢明さを知り、完敗だと悟りました。その時僕は決心したのです。君とはもう喧嘩はしない。君を一生大事にしていこうとその後色々苦勞を掛けたけれども、君を愛する気持ちは変わらない。来年は定年を迎えるけれども、無事にやってこられたのは君のおかげである。感謝している。今後ともよろしく」と、こういうラブレターでございます。初めは相對の世界にあつたわけですが、奥さんのこの咄嗟の行動というものにご主人が心を惹かれて、相對が絶対の世界に帰ってきたということでございます。

我々の世界で絶対の世界って何だろうか。例えば数字の時間で私達は習いました。三角形の絶対的条件っていったら「内角の和が二直角である」ということですね。百八十度であると。三角形の一边が長い、短いとか、こんな相對の世界を言っているわけではないです。私は、人としての絶対の世界は「生きている」という、この「命」ではないかと。この命に年齢がありますか。命に男女ありますか。命に長い短いがありますか。命というのは、私は絶対的存在である。この命に目覚めて行く、命の尊さに目覚めて行くというのが仏教の根本。「仏教の根本思想は、命の思想である」ということを常々思うのでございます。見える命は見えない命が支えている。見える命は大切にございますが、それを見えない命がしっかりと支えている。私がおここに立っておりますのも、大宇宙のエネルギー、大自然の恵み、大勢の人々の働き、そのものの力によって私はここに立つ事が許されている。その見えない命を感じる。山折先生は「宗教には信ずる風土と感ずる